

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：33801

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K22162

研究課題名（和文）韓国女性のライフコース選択に関する調査——「家父長制」の共時的・通時的分析

研究課題名（英文）Research on Life-Course Choices of South Korean Women: A Synchronic and Diachronic Analysis of Patriarchy

研究代表者

柳 采延（RYOO, CHEYON）

常葉大学・外国語学部・講師

研究者番号：90882217

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、女性たちのライフコース選択の背景にある意識（家族意識／ジェンダー意識／就業意識など）がどのように変化しているのかを分析することで、韓国における家父長制の変容の様相を捉えることを目的とした。特に、専業主婦イデオロギーが維持されるメカニズムと、その一方で急激に進行する未婚化・非婚化・少子化の背景にある意識について、ジェンダーと階層の観点から分析した。韓国社会の家父長制にうまく適応できる人々と、それに適応・同調できない人々との格差は、労働力再生産（婚姻、出産、子どもの教育）のありようの違いとして今後あらわれ、さらに階層化していく可能性があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

労働市場や社会経済的地位のジェンダー不平等だけでなく、様々な領域における男女非対称性に対する認識が高まっている近年、変わりつつある韓国女性の価値観が、社会規範とどのように衝突し、また迎合しながらライフコース選択に関与しているのかについて明らかにし、韓国社会の新しい動向を捉えることができた。また、韓国の未婚化や少子化の進行について、韓国社会では若者の雇用不安定など経済的要因のみが強調されがちだが、ジェンダーという視点を入れることで、韓国の家父長制がどのように作用しているかということが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to capture the dynamics of patriarchy in South Korea by analyzing how the consciousness underlying women's life-course choices, encompassing family norms, gender norms, and employment attitudes, is changing. Specifically, it examines the mechanisms that sustain the ideology of stay-at-home motherhood alongside the rapidly increasing trend of unmarried and childless individuals from the perspectives of gender and class hierarchies. This study reveals that the gap between those able to adapt and align themselves effectively with patriarchy and those who cannot has become notable in stratified reproduction (marriage, childbirth, and childcare) and continues to widen.

研究分野：韓国地域研究、社会学

キーワード：家父長制 専業主婦 個人化 非婚化 二重負担

1. 研究開始当初の背景

「近代主婦＝専業主婦」が誕生し、脱近代社会においては「現代主婦＝非専業主婦」が生まれるという通説とは反対に、韓国では2000年代以降「専業主婦という選択」が高学歴女性たちの間で広がってきた。このことは、専業主婦イデオロギーの展開が単線的ではないことを意味する。また、一般的には高学歴女性を中心に出生率の低下や非婚化が起こるとされるが、韓国においては、合計特殊出生率と婚姻率の両方とも高学歴女性の方が低学歴女性よりも高くなるという現象が見られている(2000～2015年、統計庁「人口動向調査」)。このような高学歴の専業主婦化・専業主婦イデオロギーが維持される場合、女性の役割は家族の再生産のための活動(子どもの教育、財テク)に固着する可能性すらある。高学歴女性の労働力化や脱主婦化が進まず、以上のような韓国の現象を生み出すイデオロギー・構造と「学歴」などの階層との関係を決定する仕組みを本研究では、「家父長制」と呼んだ。

一方で、若年層を中心に家族を形成しない未婚化・非婚化が急激に進行しているのも事実である。そのような傾向は特に女性において著しく、未婚率の推移における世代間の様相の違いが、男性よりも女性において顕著である。また、未婚化の要因が「経済的理由」である若年層男性とは対照的に、若年層女性においては「生涯未婚」という選択に対する肯定的意識が強く、未婚化の要因も多様であるという傾向が見られる。

こうした傾向から、ライフコース選択における階層分化と同時に、その背景にある意識においても変化(世代間の差)が起きている可能性が読み取れる。従来の家族意識や性別役割分業意識の変化の可能性が想定でき、同様の選択(「専業主婦」「家庭・仕事の両立」「非婚・就業」など)においても、それを選択させる意識(家族意識/ジェンダー意識/就業意識)が変化している可能性が考えられる。

2. 研究の目的

女性たちのライフコース選択(「専業主婦」「家庭・仕事の両立」「非婚・就業」)の背景にある意識(家族意識/ジェンダー意識/就業意識)がどのように変化していくのかを分析することで、韓国における家父長制の変容の様相を捉えることを目指した。

3. 研究の方法

「理想とする人生の形」と「実際になりそうな人生の形」という選択の背景にある意識について、家族意識・性別役割分業意識・就業意識はどのように変化しているかを分析するため、韓国の20歳代～50歳代の女性たちを対象とした質問紙調査および半構造化インタビューを行った。

I. 「専業主婦になること」や「家庭・仕事の両立」を選ぶことにおける「ジェンダー平等」意識や性別役割分業意識はどのように変化しているか。

：新たな規範として女性に課せられる二重負担が強まる中、「一見ジェンダー不平等に見える専業主婦家庭の方が女性の負担が少なく平等である」という意識は広まっているか。また、高学歴女性の専業主婦化や専業主婦イデオロギーが今後も維持され、女性の役割が家族の再生産のための活動(子どもの教育、財テク)に固着する可能性はあるかについても考察を行った。

II. 「非婚・就業」という選択における家族意識・ジェンダー意識・就業意識はどのように変化しているか。

：非婚を選択する女性たちにおいて、親密性の領域がどのように認識されているかについて分析した。具体的には、「専業主婦志向」「両立志向」の動向(専業主婦イデオロギー、仕事・家庭

の二重負担)との関係にも注目し、家族意識・ジェンダー意識・就業意識の変化の様相を捉えた。その結果、非婚という選択がどのような価値の実践であるかを分析することで、韓国社会のどのような特徴が現在の女性の個人化を進行させているかを明らかにした。

4. 研究成果

・「一見ジェンダー不平等に見える専業主婦家庭の方が女性の負担が少なく平等である」という意識について、学歴の効果は明らかにできなかったが、若年層女性（20～30 歳代）において顕著に見られた。詳細を見ると、その意識に肯定的である層は必ずしも「専業主婦志向」の女性ばかりではなく、「非婚志向」の女性にも顕著に見られ、若年層女性の仕事・家事の二重負担への抵抗が全体的に強いことがうかがえた。また一方で、家族の経済的・階層的地位の再生産において、女性パートナーの就業よりも、専業主婦による財テクや子どもの教育などを通じた寄与のほうが効率的であると考ええる傾向も一部に見られている。そうした考えが支持される限り、高学歴女性の専業主婦化・専業主婦イデオロギーはしばらく持続されと考えられる。

・若年層であるほど「非婚志向」に肯定的であった。「非婚」を理想とする女性たちの中でも、特に若年層においては、婚姻だけでなく恋愛に対しても否定的な意識を持ち、親密性の領域全般を性役割に拘束された関係性として認識する傾向が強かった。

・女性に二重負担を強いる家庭が現実には成立し維持されるには、ジェンダー非対称的な役割規範に加えて、家族規範（結婚規範・出産規範）がともに強く働いている必要がある。現在の韓国において（特に女性の間で）結婚規範・出産規範が弱まりつつあるように見える現象は、新たな規範の流入によるものというよりは、女性の負担が過大になるため、女性が二つの規範のどちらか、または両方を受け入れなくなったからであるといえる。その結果として、社会全体としてはジェンダー非対称的な役割規範や家族規範がしばらく維持されたまま、婚姻率や出生率が急激に低下していくと予想される。

・韓国の若年層女性の間では、親密性の領域や家族規範・性愛規範の再考が家父長制に対する対抗の過程で行われている分、家父長制にうまく適応できる人々と、それに適応・同調できない人々との格差は、労働力再生産（婚姻、出産、子どもの教育）のありようの違いとして今後あらわれ、さらに階層化していく可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柳采延	4. 巻 創刊号
2. 論文標題 韓国の第4波フェミニズムにおける「4非」志向の考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日韓国際学術学研究	6. 最初と最後の頁 75-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳采延	4. 巻 49(10)
2. 論文標題 「家父長制バイコット」としての非恋愛——韓国社会の変化と若者の恋愛	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 164-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柳采延
2. 発表標題 「韓国における第四波フェミニズムの展開とラディカル・フェミニズム」『第四波フェミニズムの論点』
3. 学会等名 カルチュラル・タイフーン2022「抑圧されたものの回帰、雑多なフェミニズムのための颶風」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Cheyon Ryoo
2. 発表標題 Family Research in Korea
3. 学会等名 Doing Family Research in Non-Western Context (International Symposium) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1．発表者名 柳采延
2．発表標題 韓国女性の非婚志向における特徴——30歳代女性のインタビュー調査から
3．学会等名 第31回日本家族社会学会大会
4．発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1．著者名 柳采延	4．発行年 2021年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 308
3．書名 専業主婦という選択——韓国の高学歴既婚女性と階層	

1．著者名 長澤裕子、森類臣、洪珉、柳采延、株本千鶴、吉澤文寿、趙相宇、金鉉洙、高橋梓ほか10名	4．発行年 2024年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 -
3．書名 ようこそ韓国・朝鮮世界へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

UTokyo BiblioPlaza https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/A_00187.html

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------